

令和 3 年 6 月 27 日現在

機関番号：33911

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00707

研究課題名(和文) 明治以降昭和20年までの台湾語会話書および台湾における日本語教科書の研究

研究課題名(英文) Taiwanese Conversation Books and Japanese Language Textbooks in Taiwan from the Meiji period to 1945

研究代表者

園田 博文 (SONODA, Hirofumi)

同朋大学・文学部・教授(移行)

研究者番号：10325590

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：台湾に赴き、従来ほとんど知られていなかった資料を探索した。国立台湾図書館等に所蔵されている資料の調査も行った。研究成果として、従来ほとんど知られておらず、取り上げられることもなかった台湾語会話書や日本語教科書、教授細目・指導細案、日本語資料の存在を示すことができた。これらの資料に現れる日本語を詳細に分析することにより、どのような日本語をどのように教えたかも明確にした。例えば男性の言い方と女性の言い方をどのように対比させて教えたか、あるいは、誤りやすい発音をどう提示したか等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国語会話書、そしてその下位分類である台湾語会話書をはじめとした中国語方言会話書、さらには、台湾における日本語教科書と日本語資料をまとめて示すことにより、日本語学、日本語教育学のみならず国語教育や台湾学といった隣接分野に資料の大枠を提示することができた。当該資料を用いて、例えば男女差や発音の誤用について詳細に分析したので、日本語史の分野で内地の資料との比較が可能となる。日本語史の分野では、未開拓の資料でもある。また、日本語教育史の分野では、台湾等の外地で、日本語の男女差等についてどのように教えたかを知る手がかりにつながり、学術的意義は大きい。

研究成果を幅広く公開したので社会的意義も大きい。

研究成果の概要(英文)： I went to Taiwan to search for lesser-known materials. A research study was also conducted on the materials stored in the National Taiwan Library and other relevant institutions. This research presented the existence of Taiwanese conversation books, Japanese language textbooks, detailed drafts of teaching details and instruction, and Japanese language materials that were lesser-known and not discussed in the past. Moreover, by analyzing, in detail, the Japanese that appears in these materials, this study clarified the kind of Japanese that was taught and how. Specific examples introduced in this study include presenting the contrast between how men and women speak, or presenting pronunciations that are easy to say incorrectly.

研究分野：日本語学、日本語教育

キーワード：日本語史 日本語教育史 台湾語会話書 中国語会話書 日本語教科書 教授細目 国立台湾図書館 資料研究

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

明治以降昭和 20 年までの中国語会話書の研究を進める中で、台湾語会話書および台湾における日本語教科書および日本語資料の重要性が浮き彫りになってきた。

新資料の発見、書名しか知られていない資料の確認、先行研究で「未見」とされている資料の発掘を行うとともに、収集した資料について、音韻・文法・語彙にわたるさまざまな言語項目を詳細に分析する計画を立てた。

2. 研究の目的

台湾語会話書および台湾における日本語教科書、日本語資料を探索・収集し、その成果を公開することが大きな目的である。さらに、収集した資料について、音韻・文法・語彙にわたるさまざまな言語項目を詳細に分析し、日本語教育史や日本語史の分野で新知見を得ることを目的としている。

3. 研究の方法

台湾に出張し、古書店を巡り、図書館へ赴いて、資料を探していく方法を用いた。実際に数回赴いた図書館は、国家図書館、国立台湾図書館(旧国立中央図書館台湾分館)、中央研究院人文社会科学聯合図書館、そして、国立台湾大学図書館である。必要な資料は、許可を得て複写を行った。

先行研究で「未見」とされていた資料を見付け、見る事ができた点や管見の限り誰も言及したことがないと思われる広東語の短い会話集の断片を目にすることができた点等、一定の成果が得られた。

研究期間のうちの 3 年目は、予期せぬ感染症の世界的蔓延により、台湾への出張ができなくなった。ただ、台湾の図書館内限定であったデジタル資料が、日本国内でも利用できるようになる等新たな動きが生じた。そのため、本研究に関わるデジタル資料の分析を進め、いち早く成果を公開した。

資料に現れる日本語については、日本語史の分野で明治から昭和初期にかけて問題となる人称代名詞や言葉の男女差、日本語の発音等について分析を行った。複数の資料を比較する方法も用いた。日本語史で問題となる言語項目を分析するという方法をとることによって、広がりを持った日本語の実態に迫れるだけでなく、台湾で日本語の男女差や発音の誤用危惧例がどのように教えられたかという日本語教育史で重要な事柄についても解明することが可能となる。

4. 研究成果

(1) 中国語会話書(北京官話会話書)の成立と展開

本研究では、台湾語会話書は、中国語会話書の下位分類として捉えている。2018 年 10 月にまとめた博士論文で論じた内容をもとにしているが、(2)(3)で述べる研究成果の前提となるため、あえて詳細に示すことにする。加えて、本研究の対象とする時期を超えてしまうのだが、戦争直後の台湾について考えると、蔡茂豊(2003)では 1945 年から 1947 年までを「日本語教育の過渡期」と位置づけており、「日本語教育の過渡期は日本語教育の『国語』教科書から台湾語、中国語の『国語』教科書の交替といえるのである」(下・73 頁)という。実際に調べてみると、新しく「国語」となった中国語(北京官話)を日本語で説明する新たな中国語会話書(北京官話会話書)へ展開している。これを踏まえて、中国語会話書(北京官話会話書)の成立と展開についてまとめたものが一つ目の研究成果である。

まず、中国語会話書および中国語教育の背景について概観した。中国語教育史における先行研究の成果を踏まえ、特に、明治時代のはじめの状況についてまとめた。キーパーソンといえる人物を 7 名取り上げ、時期区分を行い、どのような背景で、どのような人物が、どのような目的で中国語会話書を著したかが分かるようにした。その結果、明治の初め、中国語を教えた教師は長崎唐通事であり、中国語を学んだ生徒は、長崎唐通事の子弟や漢学を学んだ者であることが分かった。中国語会話書も初めは、長崎唐通事に繋がる者、士族、漢学者の子息が著したものであった。明治の初めの中国語教育は、英語教育等とは異なり、通弁や外交官、陸軍通訳官を養成するものであった。やがて、これらの中国語教育を受けた者の中から、中国語の教師、通弁、外交官、陸軍通訳官、中国語を解する軍人さらには商業・貿易に携わる者が現れ、また、その一部は、中国語会話書を著すことになる。留学生として清国に派遣された者もいた。中国語会話書の著者の背景を知ること、士族の言葉に通じるものか否か、あるいは、中国語の運用力がほんとうにあったかどうかを知る手がかりとなる。

江戸時代の唐話について詳細に調べると本研究に繋がる前提が明確になる。また、戦後の中国語会話書、中国語教育を調べれば、本研究で明らかになった事柄が、どう継承されたか、あるいは転換させられたかが見えてくる。これらは、いずれも今後の課題である。

明治前期の中国語会話書に続き、明治前期以降で日清韓会話書や台湾語会話書を除いた主要な中国語会話書(北京官話会話書)とその訳述書を取り上げた。『官話指南』(明治 15 年刊)は、日本人が作った中国語会話書であり、西洋や中国でも使われた。ただし、中国語のみなので、明

治前期のものには含めていない。日本語が現れる資料としては『官話指南総訳』『東語士商叢談便覧』『談論新編訳本』『談論新編総訳』『官話急就篇総訳』『官話急就篇詳訳』『急就篇を基礎とせる支那語独習』『急就篇総訳』の8編を扱った。このうち特に『官話指南総訳』では、小説類には現れないような公的交渉の場面が数十ページに亘って現れている。しかもこのような場面に「しめ」「し」「たる」等の文語が現れる。文語が混じることについては種々議論がなされているが、実際に口語的な文脈の中に文語を交ぜて使ったと考えてよい。このような考察は中国語会話書を使わなければならないことであり、日本語資料として中国語会話書が不可欠であると言える。『官話急就篇』『急就篇』訳述書に現れる質問表現や当為表現のうち特に二重否定型となるものを取り上げた。周辺の当為表現の現れ方について詳しく見たところ、『東語士商叢談便覧』には、小説類にさきかけて「～なければだめです」のような例が現れていることが分かった。これは中国語会話書を調べなければ明らかにできないことである。当為表現を指標として調べてみると、当時の小説や国定教科書、日本語教科書とも異なった表現が中国語会話書に現れていた。これは、様々な層の言葉の反映であると考えられる。昭和前期の言葉の多様性を窺うことができた。

(2) 日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開

二つ目の研究成果は、日清韓会話書・台湾語会話書の成立と中国語方言会話書への展開についてまとめたものである。

資料としては、日清韓会話書の成立に密接に関わる韓国語会話書も対象にして13編を扱った。指定丁寧表現と形容詞丁寧表現を主に調べた。参考のため明治初年の日本語会話書8編も調査した。その結果、指定丁寧表現と形容詞丁寧表現に関して、明治初年の日本語会話書8編には、「です」が1例しか現れていなかったのに対し、日清韓会話書(13編のうち9編について詳細に用例数を数えた)では、指定丁寧表現に611例、形容詞丁寧表現に57例現れていた。また、日清韓会話書の成立過程については、従来知られていなかったが、『兵要支那語』は先に成った『兵要朝鮮語』の体裁や語句をもとに作られたものであることを明らかにした。これらは日本語の発想で日本語が先に作られ、朝鮮語や中国語でどう表現するか模索したものである。日本語の部分には日本語の発想に基づいた資料として利用可能なものであることも確認した。これは、基礎的な資料研究として重要な点であり意義があると言える。2018年10月にまとめた博士論文以降の新知見として、近衛歩兵第一旅団編『兵要支那語』(明治27年8月7日発行)とその18日後に発行された近衛歩兵第一旅団編『増訂再版兵要支那語付朝鮮語』(明治27年8月25日発行)の本文の異同についても示すことができた。台湾語会話書では植物語彙を中心に7編調べ、「ライチ」等の語が古い方の例になることを指摘した。国立台湾図書館蔵本から台湾語会話書21種を補足して提示した。そして、中国語の方言会話書の例として、広東語会話書と海南語会話書への展開を示した。日本語の研究対象は、決して中央語のみではない。本研究で扱った時期は、日本語が話される地域が一時的に拡大した時期でもある。拡大した地域における日本語の研究を行うことは日本語学にとって意義のあることである。

日清韓会話書の一部は影響関係や成立過程を解明することができた。ただ、『日韓会話』と『日清会話』については、同じく参謀本部編纂でありながら、体裁や語句が異なっており、影響関係を明らかにすることができなかった。『日本帝国文部省年報』は実際に確認したが、同様に各省の年報等を確認すると手がかりが得られるかも知れない。これについては今後の課題である。場面との関連では、小説等では限定的にしか見られない戦争に関わる場面の言葉が現れている。軍隊言葉や軍用語との関連等今後解明すべき点も多い。また、中国語会話書や中国語会話書の下位分類となる台湾語会話書と台湾における日本語教科書は密接な繋がりがある。これについての解明も今後の課題である。

(3) 台湾の日本語教科書と日本語資料

三つ目の研究成果は、台湾の日本語教科書と日本語資料についてまとめたものである。

主に昭和前期における国語普及の三大雑誌『国光』『黎明』『薫風』(『薫風』は後に『青年之友』と改題される)と『新国語教本』『新国語教本教授書』、およびその教授細目、指導細案の分析を行った。これらの資料に見られる多種多様な日本語を分析することで、日本語史の面では、当時の広がりを持った日本語の一端を明らかにすることができた。日本語教育史の面では、昭和前期に台湾で日本語がいかに教えられ学ばれたか、従来の「国語読本」や制度のみの研究では分からなかったことを明らかにすることができた。また、資料の閲覧方法についても詳しく調べ、成果を公開したので、今後幅広い分野からこの方面の研究が進むことを期待している。

明治28(1895)年から昭和20(1945)年に至るまでの台湾における日本語教育(国語教育)について概観した。国語講習所関連を中心に昭和前期の図書を示した。また、国立台湾図書館で公開されている322種の日本語関連雑誌も示した。戦後への展開として、北京官話を日本語で学ぶ新中国語会話書についても若干触れることができた。国語普及の三大雑誌『国光』『黎明』『薫風』(『薫風』は後に『青年之友』と改題される)の日本語について、青年劇や地震の記事を中心に考察した。『国光』における投稿文の資料性についても論じた。より大きな目的は、昭和初期における近代日本語の解明である。具体的には昭和7(1932)年台湾で創刊された日本語教育月刊誌『国光(クニノヒカリ・コッコウ)』を言語資料として、投稿文における誤用と誤文訂正の実態を明らかにすべく、分析を加えた。その結果、投稿文には、母語である台湾語の影響による誤用

や母語話者では間違わないような「いる」と「ある」に関する誤用も認められた。一方で、「サラリーマン」という新しい語を使用する等斬新な例も見られた。また、誤文訂正には様々な工夫がなされていることも明らかにした。教科書とその教授書・教師用書に関連するものとしては、『新国語教本』(旧教本)とその教授書である『新国語教本教授書』、『新国語教本』(改訂版)とその教授書である『新国語教本教師用』を見た上で、特に『新国語教本教授書』における仮名導入前の日本語指導について論じた。昭和 15(1940)年に台湾で刊行された『潮州郡国語講習所用話方読方教授細目』という資料については特に詳しく分析した。この資料には、「男子教材」とこれに対応する「女子教材」があり、完全に同じ文脈で比較対照できるという特徴がある。たとえば、形容詞丁寧表現については、「男子教材」が「トホイデス」とするところを「女子教材」では「トハウゴザイマス」のように現れる。つまり、「女子教材」が「男子教材」に比べて、より丁寧な表現を用いていることを明らかにした。これは、当時の規範の一種で、台湾に限らず内地とも関連する。内地においても、男女の会話例を示した資料は多数見かけるが、男女の言葉を同じ文脈で明確に対照できる資料はあまり見られないため、当該資料は貴重なものである。当該資料の分析による成果は二つである。一つ目は、日本語教育史上の成果で、特に言葉の男女差について台湾で日本語がどのように教えられたかを明らかにした点である。二つ目は、日本語史上の成果で、昭和戦前期における女性語の規範を明確に示せた点にある。女性語については、江戸時代の洒落本に現れる男女の言葉を分析し、その淵源の解明に努めた。さらに、昭和 14~15 年に台湾で刊行されたふたつの資料(『新国語教本』改訂版の「指導細案」「教授細目」)の発音に関する誤用例(誤用危惧例・誤用想定例)を調査し分析した。その結果、誤用例は合わせて 242 例現れていた。多い項目順に示すと「歯茎音(ダ行音・ラ行音等)」73 例、「両唇音(バ行音・マ行音等)」43 例、「促音」40 例、「直音・拗音」24 例、「無声音化」23 例、「長音」10 例、その他 29 例であった。この誤用認識が発音指導の際の拠り所となったと考えられる。

主な発表論文等に示したように、雑誌論文や図書という表現形式で、膨大な資料の存在を誰もが分かる形で提示し、そのうちの特徴的な資料を「言葉の男女差」「発音の誤用」という項目について詳細に分析し、日本語教育史や日本語史の研究分野に一定の新知見をもたらした。昭和 19(1944)年台湾刊『壮丁読本』の分析からは、日本語運用力に問題がある状況下で、規範的な軍隊言葉をいかに習得させようとしていたかを窺い知ることができる。今後も膨大な資料を整理しながら、多くの言語項目について詳細な分析を続ける予定である。

<引用文献>

蔡茂豊(2003)『台湾における日本語教育の史的研究(上・下)1895年~2002年』大新書局

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 園田博文	4. 巻 16
2. 論文標題 昭和19年台湾刊『壮丁読本』の規範的な軍隊言葉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『同朋文化』	6. 最初と最後の頁 165-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 園田博文	4. 巻 19-3
2. 論文標題 昭和初期台湾刊『新国語教本教授書』における仮名導入前の日本語指導について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『山形大学紀要（人文科学）』	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 園田博文	4. 巻 17-3
2. 論文標題 戦前の規範としての女性語 昭和15年台湾刊『潮州郡国語講習所用 話方読方教授細目』 「男子教材」「女子教材」を資料として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『山形大学紀要（教育科学）』	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 園田博文	4. 巻 59
2. 論文標題 台湾における国語の発音指導 昭和14～15年刊『国語講習所用 新国語教本日案式 指導細案』等2種における誤用例を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『国語学研究』	6. 最初と最後の頁 369-383
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計6件

1. 著者名 園田博文	4. 発行年 2021年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 535頁中20頁分(69-88)
3. 書名 「昭和20年までの海南島における日本語教科書と海南語会話書 『ニッポンゴ』 『海南島語会話』 『海南語初歩』の果物語彙を中心に」 『近代語研究 22』(近代語学会編)	
1. 著者名 園田博文	4. 発行年 2021年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 400頁
3. 書名 『台湾における日本語教科書と中国語会話書の研究 昭和20年まで』	
1. 著者名 園田博文	4. 発行年 2020年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 148頁
3. 書名 『日清戦争以前の日本語・中国語会話集』	
1. 著者名 園田博文	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 185頁中12頁分(44-55)
3. 書名 「洒落本の語彙」 『シリーズ<日本語の語彙>4 近世の語彙 身分階層の時代』	

1. 著者名 園田博文	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 414頁中16頁分(237-252)
3. 書名 「台湾の日本語教育月刊誌『国光』(昭和7年創刊)における投稿文の資料性 誤用と誤文訂正を中心に」『論究日本近代語 1』	

1. 著者名 園田博文	4. 発行年 2019年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 571頁中21頁分(191-211)
3. 書名 「昭和初期台湾における日本語教育月刊誌『薫風』『黎明』『国光』について 青年劇と地震の記事を中心に」『近代語研究 21』(近代語学会編)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石崎 貴士 (ISHIZAKI Takashi) (20323181)	山形大学・大学院教育実践研究科・准教授 (11501)	令和2年度より研究分担者。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------